



会員近況

積水化学工業 岡本 龍二

私の入社時期は、神武景気が終わってちょっと不景気なしかし高度経済成長が始動するところで、全国的なSQC導入定着活動期でした。統計解析の仕事を通じて、現実と数理のからみ合いに興味を感じながら、仕事の合間にMorse, Kimballの本, Saatyの本, Churchman, Ackoff, Arnoffの本などでORの勉強を始めた。Taylorの“科学的管理法”を読んだりしていました。そのうち生産・在庫計画/管理, 予測, 事務システム分析, 輸送問題などの仕事にめぐりあい、現実的なORの勉強をさせてもらいました。問題解決のアプローチの仕方について、現実問題に関連して横山阪大教授の教えに接する機会を得たのもそのころからです。このようなOR歴をたどってきましたが、今後、大げさですが、何がしかOR on ORについて考えていこうと思っております。ORがproblem orientedであるといっても、テクニックの開発がまた重要であることは論をまたず、計算機技術の発達ともなうThinking with computerの変遷がテクニックの開発にどんな影響をおよぼしていくか、またORが経済学、経営学、工学などのそれぞれの

分野に研究のための方法としてそれぞれと組み合わせて取り入れられ定着していけば、それぞれの分野がORのphilosophyにどんな影響をおよぼし、ORにどんな新しい問題を提起していくかといったことも、今後じっくりと腰をすえて見つめてゆきたいと思います。

三菱油化
四日市工場管理部管理GR 堀内佐武郎

昭和43年入社。37才。入社以来9年ほど、システム部にて、生産関係(LP, PERT, SIMULATION)&物流のオンラインリアルタイムシステムを作り、その後1980年8月から、現場の生産品質管理といえ、もっともらしいですが、工場の窓口庶務業務をやっております。

1980年夏第二次石油ショックの影響により始まったコンビナート崩壊は、いよいよその終局をむかえようとしています。現在、私は、各プラントのクローズド化に興味をもっており、LPでの最適化と同時に、各プラントへ損益状況をfeedbackし、彼らのモラルupを促すことを考えています。すべての輸出国機構がその機能を発揮した期間は短く、OPECも崩壊するであろうし、また社会も都市化の中で村落共同体精神が失くならうとしています。コンビナートもその例にもれず、共同体的から、ガン細胞的なものに移行しつつあります。

このような背景の中で、工場運営管理とは何か、何をすべきか、に悩んでおります。先端技術の進歩とともにtoolが目的を決めるような傾向にありますが、われわれOR屋は、やはりstoryを明確にし、何が目的なのかを見定める必要があると思います。すべてのエントロピーが増大傾向にあり、その極値においてあまりに環境に過敏になり、ショックに対応できなくなりますが、今やエントロピーを減少し、企業も含め生命力を増す必要があります。

装置産業に携わる方で、私のような立場にある会員諸兄ぜひご一報ください。

早稲田大学大学院
理工学研究科工業経営専門分野 宮野 安弘

現在、数理計画法の経営システムへの応用、特にシステムの目的にトレード・オフが存在するような、いわゆる多目的計画法を主に研究しております。ところが、この分野の研究は、皆さんよくご承知のとおり、公共性を有するプロジェクトないし意思決定問題への応用が主

訃報

謹しんでご冥福をお祈りします。

佐藤 薫氏

昭和57年10月29日、がん性腹膜炎のため逝去されました。享年48才。

小河原正巳氏

昭和57年12月25日、急性骨髄炎のため逝去されました。享年70才。

服部 正氏

昭和58年1月29日、心筋こうそくのため逝去されました。享年56才。

で、企業サイドでの活用はまだこれからといったところでしょう。それでも材料の配合比や、製品の性能決定などへの応用例はあるのですが、私のように、予算編成やプロジェクトマネジメントへの応用を手がけているものにとっては、選好目的関数や多属性効用関数の導入例は、きわめてまれなものといえるでしょう。

思うに、日本の企業経営は、今や世界的に通用する“根回し”という言葉に代表されるように、コンセンサスにもとづく意思決定が効を奏しているため、ORワーカーは1つの目安として最適解といわれるものを1つだけ答申すればよいと思われている向きがあるようです。しかしながら、“根回し”の効率化や、欧米なみの意思決定の集中化や、トップの指導力が問われる現状では、多目的計画法の改良や応用はさらに重要視されてくるものと思っております。

某コンピューターメーカー勤務 **鳥井 寛**

計算機の設備関係の見積、コンサルテーション、顧客教育を受けもって3カ月ばかり立ったところである。費用と効果がきびしく問われる中で、最近では自動運転システムの考え方が計算機にもおよび、そのための基盤整備としての防災システムへの関心も深まっている。これらの基本的対策の根底に流れている思想は経済性と安全性と信頼性ととの3つの概念の調整にあると見ている。個々の概念別には工学の文字をつけた分野が形成、発展、普及、定着の各段階を経つつあるようであるが、この三者の調整を計るような考え方・技法というものが存在し得るのかどうかと思いを致すと、時代を背景とした流れの中でしか立場を持たぬ勘の集合体でしかないのかとも考えられる。人間における勘と科学的思考との両立という具体的な存在と歴史的な事実の証明が一番のよりどころかとも考えている。

最初の職業であった鉱山地質を応用分野に含んだ数理地質の最近の進歩を見るために、中国の「数理地質学の方法と応用」(1980年)を読んだが、ORの諸手法がかなり適用されているが、結局はモデル化に成功するかどうかにかかわっている。それは勘の問題か、あるいは事実に近いモデルであるという実用性の問題だけか、いずれにしても意思決定をするためには何らかの個人の哲学をそれぞれの立場で持たなければならぬ。三者の概念の調整は果してORの対象になるのか。これが問題である。

日本アイ・ビー・エム 営業企画・適用業務推進 **外山 味之**

私は、「複雑な対象をその実体を失わずに簡潔に表現したい」といういわば欲ばった人間の要求」に対処するべく、発想以来15年、ドイツの情報に接して以来7年の歳月をかけてきた。この観点から率直に現在のORの方向に対し、1つの不満な点を指摘し、この解決手段としての「構造マトリックス」(マトリックスの一要素がまたマトリックスをなしている表…詳細：OR誌7月号に紹介論文)に皆様の関心を呼びたいと考えている。

現代のORの危機(あえて言わせていただく)は、一過性の問題解決にとどまりがちで、日常的、定常的に広汎な手段となっていない点である。すでにコンピュータは量、距離、即時性の問題に可能性を示し、マイコンの普及は庶民性にもせまっている。またデータに関しても、「ない時代」から「ある時代」への変貌をとげつつある。ひとつORの定常的基盤確立が情報化の波の中で定着しにくい状況にあるのではないだろうか。

これには、(多くの理由が挙げられようが)複雑な社会事象を人間にとって親しみやすく表現する。つまりVisibleにする努力が、システム化のあらゆる面で不可欠と考える。

私が担当する手法は、ようやく多くの共感を得、いくつかの実績を積み上げてきた。この方法にとりくむことにより、ややもすると仔細な点にとらわれがちなソフトの世界にあっても、みずからをこまかな視点にとらわれず保てることに満足を感じている。やがて多くの問題が構造マトリックスをベースに継続的OR問題として展開する時代を夢みつつがんばるつもりである。

正 誤 表

1月号フォーラム「中国科学院を中心としたOR活動について」(三根久)に誤りがありましたので以下のよう訂正いたします。

	誤	正
p. 42 左 ↓ 9 ~ 101947年 に長征が終り.....長征が 終り1949年に.....
p. 42 左 ↓ 12錢学林.....錢学森.....
p. 43 左 ↑ 19程侃の4人...	程侃, 刘彦侃の5人
p. 43 右 ↑ 17重複し重視し